KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

中村俊定文庫
文庫18
654

明治四十四年十月七日三條三町佛檀屋前古本持出店ヲ購ス

京都帝國大學圖書

藤藏

中村俊定文庫

永叔拙筆義を移義の歌ハト定要
ちゝ此道を伝らゐて書ゝに義みせり物を
生世の陰命ハ赴ちゝ冥別のひとり源
きゝゝゝゝゝ正流をうけしゝゝ今ゝを
俳諧も世の情に連ゝ字ハ風雅
ゝゝゝゝゝゝ変ゝゝ移り安く変ゝ
みゝゝゝゝゝと見ゝゝゝゝゝ義を
圍碁乃弦を近く之所の勝ちゝ物を

出しかね猶及さるの余りとも拙きあらむ
おもふ事の卿よく此割愛の叶つれは
さる所は失すれ白く序文を書き文章に
満たいらつくに紙魚の援事くちあく
是て連社の評定も得まて雲意たり
かくしてもならし罷て我はてえぬ
うちこ新にさやき寛翔り紙の色
今の此新舎の主人か遺稿を見て

從ひて十年と捧げ上ぐる事とはなりぬ
先師はいつれ頃よりか文机上の翫とて衣の手
袖を離しあそて去る後道風の跡
あしき翔し光の後なる眼静なるは
或時は筆硯或時は墨をとりかく
てふ業の不辞なりとて衣れて
紛むるかりしもいやう翔く去年辞から
身に老を得るにつけて其床塩字の如くに

壮年乃むかしに飯ちかえて人を驚かし
めしもなし無なかりしをよおせけりし時
貌に表まの水に浦や出さなれまへは
名ひ捨られしを今此集の名題にて
其像の微をいましやと二子かたらひを
うかひしに二子御てうしとつくしいへる
いまかの紀名も清き年なる時風寄せ
まつ駒足跡をあしに捨なんと生ける

名利をいとひて世に深くかく
足ぬるを同しくは名をも辞すへき微
の寡に蔵して義の文といふやと
あるは閑に勝るみに籍をもす青に
結ふ小筆に纔もおかさらすのち勝
よる談合の年とを然たりしはたらん義
のこともらつらね年みて草稿なる
をいふてる小冊に書にこそなる文談家の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛政三辛亥年仲秋

敬仕利賢の肖

今そ知る

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

石渡園三穎模書

蓑笠をとりて上

春

題城

鶯をうとましとおもふ時鶯のうゝ伊代の花

美をとゝのふる時をまて

梅をもとめ松をもとめてゝ節繩

えりもとおとしみ食衣

ゆゝしうもとむるもの猿蓑也

年柳の神代のまゝの統御を
柔和の御[illegible]
時に水男なり事柔弱堅強
梅の事さまゝに見えて動靡
嫋たるさまは柳の如
強くも強きものとなりて茅の如
情のあるものとなりて生ずるなり
風を[illegible]

見えぬ者ゝとなりて[illegible]
ワの[illegible]
雪を解て物を生ずるの[illegible]
雪を[illegible]
[illegible]
[illegible]
梅の[illegible]
梅の[illegible]

梅の花咲かば編みて遊ばむと思ひ
起きて出でて見れば見まほしき梅の花
思ひもかけずあつらへ遣はす梅の花
梅の花咲かば行かむと思ひ
梅咲きて急ぎ見るに成るまで
梅の花咲かばこの花の文らかし
咲きたりし梅の花の梅乃花
見れども見れども見れども飽

結びて義の心あるを伝へて梅の花
義の心を世をめぐりもあれば梅の花
見れども興ありしかば庵の毎
すがらに見れども見れる梅の花
梅の花の梅の花の梅の花
君にあるまれ遠うち梅の花
大伴の大伴の大伴の大伴の
潮の満ちゆくまで望る梅の花

先ゆきを如きらせ高き柳か峯

谷り唐建てかくれ初音かな

鶯や蝶まつらる藪 明石

鶯や屏風乃梅を隔てけり

鶯や鏡にうつる剃 京の清見寺

峰之飛花や 梅の清らき迄て瓦屋招

枝うつれ雲えて滝や 芳野乃雪

梅がくしを枝の雪見やうさきかな

苗代ハまして名て残る雪かな

盃中入や泳ぐ起る新豆 附子

躍る手も揺すり付くる霞かな

わかる海の船を深くれ霞下野

漁船を明るみえや 野霞

引船乃志れまゆゑ霞かな

白魚はまつ糀み也ちて梅かな

初午や光るうる好の赤色深し

出代や到り井戸をのぞき
出代や踏まれまいとて焼案
終の宵を新しく新しき事
縁の下やあのまけうの川の末
焼入れの倉の宵やあれみれば
さらさらと流れあり底さえて乙鳥の
れ
れ
水も鏡を照らし流れをうつす
主道の流れも光りやうつす丁

けりけりや寒き八ツ山見やまれば
蛙乃月に形うつるやあれ草
ナ
ナ
水鏡に面乃影
鬼四ツ月を押ふ蛙下鏡
流れ神も極彩色や浮彫像
金色の光りをうしろ神人像
雪ちらちら降るなかをわたる人

湯殿山に温泉の出る岩屋道
京都より野くだりの乃京山
いとゝ山の牛乃京伊勢参り道
目うつくしかるべき出るゝ猫の毛
猫乃毛虎毛斑毛三毛迷子
捕鼠しの捕うまるし猫乃毛
獅子猫の縞の物ゝ
蛤の子出る山を分る月

沖捕をうつりゆくや獅子月
翌乃寄みけり沖を出る鏡月
淀しくやく故ゝ猫
猫に出るゝ乃ゝ田塚
獅子猫に形色ゝ二毛門
捕ゝ中ゝ猫ゝ猫ひて動猫
岩竜乃ゝ中ゝ動ゝ
山ゝ出る竹ゝ

至斎画みの絵あてしらぬ乳
花るよりわしきそまれ狂ある
烟るちや旅る栗山花をさる金
寒くまれ紙をとけるる鶉の乳
菜みれ茶や白い新出に縄簾
うそ淋し木槿の花みれ花た折
きえしされ蚊の寒まいる薊うる
液わも室根小や風中

蛍こりしえこて落るやいろの深ち
羽衣の袂みれ雪見や法寺枝
新棚や宝子に供ふ月の宵
春し錦や手かけておく机のと
とハさくを一日を移る瀬平しうち
蛸壺に縁り南乃汐干しう水
る刀とり世帯に何子に境加減
中のよん畸乃出合や母子紐

咲かゝるまてりや折人梅の奥
戸よりけさ蕗もつむや挽れ粥
春雨や女をのせし肩り牛
もまつる杖一本しぼんて名り
まちまや花も川宗まて抹まて
汲湯を呑もらん谷のの小鮎
朝霧の花ならてさとす乃乳
手枕を沈にしむや春の乃夢

手枕にうつる名もなき花の雨
白の宿も京に梅も雨や春の雨
筆宗を捨てゝあそこ雨春の雨
新乃年桜もる蝶や春の雨
春風や梅に浮れん能き之
春風や柳に流る川乃江
朝ぼらけ花の須磨乃浦
よの中をさらに佛の浮て

市中に雲をあらそふ樹の
色のうつる新しきを山はこそ
拝さしく樹をも小井戸や山をこそ
蝶くあるこをたけきる樹を
うつろ之白えてあらわ宗乃山
焼くもまわ山をやきをみ堂
弁当の樹にまけわ法しる
堂てり日をかをきるつ〜ら

山吹やてる樹打入くうんてりる
山吹や井戸の古ひるるうあ
塚一叶物うるさやあれ乃宗
出うて意みれわ地意やあれ花
ふやれてる芝のたるける草うれ
樹をて肌を合わすをうれ
婢銭て足をを宝市本蓮花
新をみ焼炉とかるを樹孔

海棠や　梅てなきたい弱れすの
蓬さくや　冠さ高く　松乃うち
り　芭蕉や　根ぢまれ　ぬさ　廣け
ぬさ　いうて　登飯の　交も　蹄さ

夏

物くさみ　章も出るも　文　去
良さに　似さいさ　記らし　文　哀
集　家に　屏風も　引て　仏生會
生ケ　蹈み　書に　居ても　忘れ　堂
麦　秋や　寄合の　塙り　我　孫　寫す　家
作む　人の　うちとさも　苦乃　忘
咲さ　ぬ　居る　把て　牡丹　乳

音羽にて花りに余所杜母うか
蓮さへ手向るゝを杜若
白露にも合ふしかすみ川ちる
鬼灯橋よりや落るしう紀洗ちる
葉りんて鴨を杷しけり杜若
芝橋くりし蜂兼縁りや尾花の芯
有そてわうな世ま傍まやけしみ花
卯乃花や世そ思ひ合のゝさて

蕣咲るもまた後ろされけりの楓
紫みし戸よりこのおみ苔
葉山の石も和らく句の葉の花
瑕ちる賤も緒かてこゝの筆
岫ちと出でぬ雲にとくにや夏木立
流るゝ川中に流して夜木立
鵠鳴も小ゝ出て知らね花木下宿
啼安そ奥ある木下やみ

縁いても夜遊の門や相乃花
見まいまてえ本陣や桐の花
酒入れ門に似合し桜桐の芸
月代に山見るて見てかとくまで
気はあく場をちらし時雨
波のおもて椿し明る郭公
川ぎし雲に流て保ゑてまで
時雨かつ見の響の浮る時

小京女の夜あかし加へとる
持に似る芝居のまて中人とる
宗吉名桔梗山て秋らしき
宮中の昭も振舞川やうらむとる
夏中見て山夏なりかんことる
荻吉蔬声も成る中引く子
蝙蝠中よ紅を入れ辻紀蛇
かはりに面かれてみる燈籠つる

夜ゝ月ゆ[illegible]の[illegible]
[illegible]
初鰹はつ[illegible]く[illegible]

遊柄

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

汁をすゝめ孫に清く山の栗を栗
をいかや世を口ずゝ乃竜を姫
合詩歌を小替れ翠を書れ四つを乳
ワの仲やさうをと毎乃一伝うあ
譬れ歩あて雲新を立ちて仲
稱のてらんをとらを男猶を乳
巣呂を男とり西新四うを
子を歩や立ちうを乳を新を新

早乙女れ立を山の出る法を乳
打て春を山を立ちを春を
此なを汗を川を清れ四を
沙を芝を蓮を立を新を
川風の力を立を川を蓮を新
を立を立を四を立を蓮を
月新を蓮を立を蓮を蓮を
人を立を立を蓮れ蓮を蓮

月を待て踏石数遣り那
垣写見を負て怖ぶ中蛸牛
行き其わ月乃内田て水鶏
陸く舞く大江宮を鶏
紙中乃書て結ぶ文に宮り
湖しまを鈴さきよち水鄭
川かわ中翔乃月うも風蓋
川物中鮎み光りおもも

松明を持て月乃物毎乃
宵月乃入を物毎れ物乃
内又海乃あを乃物毎
世乃家乃人あり歩宮
紙筆を金中園清く紅て人の
月詠中乃出て出る物毎
中遠乃燈を殺中乃二指
歩く指る者て夏毎て芽乃穂

帆越の法にて出す事うの事
を知るに過れ変多れ事うを
月のたむ波をもちんこ事うれ
岸乃指しうの方事丁鏡
見物も都に接する分れ見うを
夕くもやうう海くれかるを
白ーー押流し事うこれ月
物てみるに知らぬ出用や

尼作糸へうまて世をそる恵うの
ぬくを事の事に達うに関う那
二道のあるを見て世如人
寂ううて嘆をかうふ涼うれ
家下をそ見ゆく波や夕涼
赤面寺れ帰を蓋うを夕見之
うち物うを猪く風や門すを
あての字れの見て事に涼を

すくしさやかなるさまも弁ぜ
雲ゐにすみ澄のぼりて雲ゐ
よりしぐるゝ水とうるをかぎ
ぬきせずくもりもなきをかぎ
りなくこゝろをかぎりなき
人のこゝろをかぎりなき
蓮葉やさけをぬぎ世をのがれ
蔓草咲て馬をもかさぬ
氷結みてうちくけて蔓乃も

清雪和みゆみ常の結ひさけ
丈私語を指ゝうとし絡み
蔓ゝ和海去れ繋ぎ枝を
夕ゝ和指結ゝ印を極
乃ゝ月の影もしも護み月
夜乃月に象川ゝ蔓のおと
蔓乃蔓ゝ吉ゝ蟬の志ゝれ
夕の和ゝ我志ゝ和絡ゝ和蟬の志

川蝉や身をとらへる水かゞみ
蓮の実の飛あと追ふて翡翠

秋

よく吹は風のさへ川音もけさの秋
出けしあきを一夜そなたし二ツ星
出ておるよ銀河し星の玉櫛笥
文殊会や猿の子さへ知恵もらふ
さし身やと灯うけ蝦くや奥へ続
雛なく嫁しろ數や玉中流り
綿まで蝶とふまつ蔵やなか月

あれ紫草て咲ちを見せ原焼野の
淋しさに頃て草の焼る野
見る出る野の草かるる頃うす
見るよりわすれられぬめせとも
逢ちやすれ君をたてる私の風
逢ちやすれ君をはらてまつ
草子ちわすれて草ちめて出ちる
指を一ぬと出ぬ出ちる

ちに二ちて仲を割ちるお撫ちる
雲ちる時ち綿ちる露乃玉
入相ちる尋乃鐘和尚ち夢
川夢やちて夢を清ちて社
猫妻に いさ蛍惜ち神の影
猫妻和猫山の後をりちる
猫妻和いあちの松れ遠ちへ
御光ちる岸和れ風

物とまれあるとこうら峰もせく
玉敷をうまれなるる姫姫うれ
まんあをと吟て見るけやらうを
法をあるとさ無名のあるみおりくに
姫姫や系を刈まて子みせ半
夏系みせやあるこ伝りとれて生る変
彦れ刈そ雪うう清るもしの変
保系の里をたのもし生みて色

焼系和や保ふをそ的れ中
八親や新系をれ梅の花うる
先れうく經ふさあ早稲田るれ
之ケ月や先生人うと生て見せる
行者や就をの船うる終それを
系系れ型ちる法をうれ日
皇系を伝うあ人を今の日
系うやなをうあ人をる

名ものやこゝろ深みて出侍をゝ水のもの
律院を出たく思ふあり乃思
わるゝ思ふ毛ものゝ情を変ずる
本座や信濃の白衣姿しを
捨て行む姿をよそ思ひ
野の橋猶ほ涙ぬ庭をうゝ
忘られ御乃匂ふ成ふう
当年とうて寄ふして暮みを

陸くの細道もあり埋れ草
新参の中何ふう新風乃書
捨ふ分のなくをあるみ風
おのう事りを定ふ業わり
下ふれあ色ふしかる孫う風
広を所ふて音近ふ作ず新
捨ふ世をふと知ふ庵乃孫
融ふ人時をて迷ふ新う風

鶏の尾は世々まくあふ鶏の巣
夢さへの横ふくりかゝるつばめ
遊びて尾鶏を古し鴫の色
鴫立川や流く夕日は浅ひ阿
初ア乃半貫く哉くや咏子き
ア哉くや畑ゝき茂みきき迷
石風呂は秋をめく之てアの色
ア哉くや明りのあやの揺し 拾

行人をかくやもとも世え流り鳥
然るとみるゝ静や鶉か色
日は清ゝて松を越るや鴫の声
萩鶏やその影に露を撒の浦
朝くもき鮮にゆく鹿みの色
かなしさの秋を清やしりの色
鹿の声や秋を清き哉く明て行
鹿の声や秋うなく山乃端き哉る

物語や紀伊へ出て滅る水戸の板
ヤ久安の頃鞍馬の聖うれ
鶯のおとこ引ちらすゆくゆく
ものを指て捨てる聖ハ
はつ子を新とも云ふ所
豆腐を乳こ乳ものうの
狐ハ尾を乳こ乳ものうの
出て遊く時の清水寺の

大名の宮とあつ中寺の蓮
杉風ハ如ハ時ハ中之
ものうの花ハ中之
鶯ハ今ハ鶯ハ
数多ハ鶯ハ
山守ハ空ハ
義経ハ清水寺の
清水ハ中之

此花の坂乃とまてみる鬘挿の花
青柳の是もしかたきまゝ拙なる哉
うら枯や紅葉の錦のちりかゝる
まつれやおくれをみもし角力草
あさし見る朝は出来て新酒哉
世をすてや蓮の葉こそ力こちる錦
起しや紅葉の錦きりしかる
秋風や嵐を柱みかけ

秋寒し只て何の業や我さし
鈴の音をとりたる秋の声
浅き夜の星の雲(?)の暮の秋
露かけつる小蝶世を出る秋の霜
ちり日も老て尽きし花の寒さ哉
秋の空やよき人をまつ浪しける
永き夜の哀れもかな
秋の夜の嵐の延はかた花の梨

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]や松の人なら侍かうう
[illegible]しの巻うをうつる柳乃
風乃[illegible]や猫をくるうる時
[illegible]うもく乃のかうく拾遺乃
[illegible]風乃霜乃花乃拾遺乃
[illegible]の流しかうく拾遺乃
[illegible]遠砂乃てかを夢乃
[illegible]い海く[illegible]みて角

[illegible]乃拾遺おてみるう拾遺
拾遺の[illegible]乃拾遺乃拾遺乃
[illegible]や拾[illegible]みて
[illegible]菜花や[illegible]人なあて寮の花
拾[illegible]乃[illegible]乃[illegible]
[illegible]菜[illegible]や軸乃現く続石
[illegible]く[illegible]や大拾引
[illegible]く他力や寺乃大拾引

華ゝの中にて
夏草の
夏草の
夏草の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月新しく細雪うしろて沙打つ乳
を紙和刷て出雲れ雲れ雲れ
片寄うい京れ水雲和深く定
城の雲紙鼠くの雲紙雲和雲
鶴鬱と雲く龍雲り雲雲雲
悲しうる佛雲う雲えぬくわ雲
紙雲雲雲雲雲雲雲雲雲雲
特雲雲しく雲雲雲雲雲雲

雲雲雲和雲 沙米の中に修羅をやる
雲雲塔雲和雲雲雲 紙雲 力 雲
曉雲 紙雲和 雲雲念佛
雲雲雲れ 特雲雲雲雲雲
雲人雲雲雲 雲雲雲雲雲雲
蟬雲雲雲 灯雲雲雲雲雲雲
雲和雲雲雲雲雲雲雲雲
早特和雲雲雲雲雲雲雲

確乃宮一時をきめ梅
雪くくとみんてつくるの宮の梅
業浪と一ぱんゆうし　多　桂
前　屋子　復　梅　と　さ　今　羽小浪
あくかるゆとの森さめ餅のあて
水仙とさ　ちゆ　古ひろう　餅　み　茶
家　乃　お　碁　と　名　の　付　くくし　志
お　体　し　書　と　ろ　く　や　れ　ち　さ　め

抱くくのるるみとそのの数やたるる私
まを浦をあるる餅るて咲をうれ
宗田中　有慶
るるるの宵て浦を咲をみるのるる
祇園の　月　と　思　る　あ　や　る　し　慶
年　ま　り　を　鈴　み　て　あ　り　大　こ　十　ひ
るの中一と　様　く　み　く　ひ　を　大　海　ひ